もう一つの『梵天所問経』――和訳と訳注――

五　島　清　隆

1　はじめに

筆者はこれまでに Brahmaviśeṣacintiparipṛcchā（Tohoku No.160, Denkar-ma No.96）の蔵訳テキストとその和訳・訳注を公表してきた[1)]。この経典はインドの学匠たちにしばしば Brahmaparipṛcchā の名で引用されるが、これとは全く別の Brahmaparipṛcchā なる経典がある（Tohoku No.158, Denkar-ma No.188）。今回訳出を試みたのはこの経典だが、梵語原典はおろか、漢訳も存在せず、成立年代は不明である。デンカルマ目録に掲載されていること、翻訳者が Ye shes sde であることから、訳出年は西暦800年頃ということが推定されるのみである。

経の主題は、「身体に随順する念（kāyānugatasmṛti）」を中心とする（四）念処（smṛtyupasthāna）であるが、全体的に、修行法（シクシャー、学処）を具体的にかつコンパクトにまとめたもので、初学者に向けての手引き書の感がある。また、本経で用いられている用語や比喩などと共通する、あるいは類似するものが、『シクシャーサムッチャヤ』に見出されるが、これは単なる偶然で

1）テキスト：1979年度京都大学文学部修士論文「“Brahmaviśeṣacintiparipṛcchā” について」資料編（全6章の北京版・デルゲ版の校合テキスト）；The Tibetan Text of the Brahmaparipṛcchā, **vol.1, ii+61pp,** 私家版，1981年（次注に挙げる版本大蔵経5本と写本大蔵経K本を校合した第1章の校訂テキスト）。

和訳・訳注：「チベット訳『梵天所問経』―和訳と訳注（1）～（6）」『インド学チベット学研究』第13～17, 21号（2009～20013, 2017年）に所載（版本大蔵経5本と写本大蔵経5本を校合して翻訳）。

はなく、経典作成者の置かれていた思想的・文化的背景を探る手がかりになるものと思われる。今回の翻訳が、たとえば、大乗仏教徒によって四念処がどのように実修されていたか、あるいは『シクシャーサムッチャヤ』所引の経典と本経との関係など、大乗仏教研究に少しでも裨益するところがあれば幸いである[2)]。

2　和訳と訳注

インド語で、“ārya-brahmaparipṛcchā-nāma-mahāyānasūtra”、チベット語で、聖なる「梵天による問い」という名の大乗経典。すべての仏と菩薩とに礼拝し

2）訳出にあたって使用したのは以下の資料である.

写本大蔵経

1　単行の大蔵経

B : Bathang MS Kanjur	No.75	mDo-sde	Tsa　9b6–18b1
Ph : Phug brag MS Kanjur	No.275	mDo-sde	Ku　35a3– 47a6

2　Them spangs ma 系の大蔵経

K : Kawaguchi MS Kanjur	No.163	mDo-sde	Tsha 112b1–123a7
L : London MS Kanjur	No.117	mDo	Tsha 116b-127a5
T : sTog Palace MS Kanjur	No.162	mDo-sde	Tsha 131b4–143b6

版本大蔵経

3　Tshal pa 系の大蔵経

C：Cone(Co ne) ed.	No.798	mDo-mang	Ba　1b1–12b1
N : Narthang(sNar thang) ed.	No.144	mDo-sde	Pa　1b1–16a4
P : Peking ed.	No.825	mDo-sde	Phu　1b1–11a2

4　混交が見られる大蔵経

D : Derge(sDe dge) ed.	No.158	mDo-sde	Ba　1b1– 10b4
H : lHa sa ed.	No.159	mDo-mang	Pa　1b1–16a2

上記のうち、N は，大蔵経の版全体としては Them spangs ma 系と Tshal pa 系の混交が見られるが、経典毎では、いずれかの系統で統一されている．本経の場合，Tshal pa 系に属する。また、B は13丁と16丁の番号が飛んでいるが、内容的には連続しており欠落はない。

上掲のうち P（北京版）と H（ラサ版）の丁数のほかに、『中華大蔵経・甘珠爾』（蔵文版対勘本、全108冊、2008年）の第59冊の当該部分（3 ～27頁、本文は D 版の読み、Zh と表記）の頁数を本文に記入した。なお、読解に殆ど影響を与えない異読（’ang と yang など）や単純な脱落は、いちいち明示していない。訳文中に参考として挙げる対応 Skt. のほとんどは Tib. から想定されたものなので、たとえば（*vitarka）のように，＊印を付けて示したが，その名が広く定着しているものや引用文献に対応 Skt が見出されるものについては、そのまま示した箇所もある。

奉る。

I 序

I-1 四禅から別の三昧に入る世尊

このように私は聞いた。あるとき世尊は、ヴァイシャーリー都城にある[3]マハーヴァナの重閣［H2a］講堂において、一万二千の比丘の大集団と多くの菩薩大士たちとともにおられた。

そのとき、世尊は、(4…静かな夜の中更（中夜）において…4)、結跏趺坐して念（dran pa, *smṛti）を確立し、(6…尋（rtog pa, *vitarka 大まかな考察）を伴い、伺（dpyod pa, *vicāra 細かな考察）を伴い、(5…三昧から生じる…5)喜（dga' ba, *prīti）と楽（bde ba, *sukha）がある初禅に［H2b, P2a］入られた…6)。世尊は、そこから出て、(7…尋もなく伺もなく、三昧［Zh 4］から生じる喜と楽がある第二禅に入られた…7)。世尊はそこから出て、(8…喜の欲から離れ、捨（平等）を保ち（btang snyoms pa, *upekṣaka）念を具え（*smṛtimān)、楽に住する第三禅に入られた…8)。世尊はそこから出て、(10…楽を捨て、以前にすでに苦を捨て意の楽と意の不楽がなくなっていることから、苦もなく楽もなく、(9…捨と念が清

3）grong khyer yangs pa can na (CDHNP: yangs pa na, BKLT: yangs par).

4）mi nyal tsam gyi nam gyi gung thun la. *Mvy* 8228: praśāntarātri, mi nyal tsam. *SP* 21.16: rātryāṃ madhyame yāme, Tib.: nub mo nam gyi gung thun la.

5）ting nge 'dzin las skyes pa, *samādhija. ここは三昧に入ったばかりなので、注 6 にあるように、「遠離（欲愛、悪、不善法から離れること）から生じる（vivekaja)」とあるべきところ。

6）*Mvy* 1478: viviktaṃ kāmair viviktaṃ pāpakair akuśaladharmaiḥ savitarkaṃ savicāraṃ **vivekajaṃ** prītisukhaṃ prathamaṃ dhyānam upasaṃpadya viharati.

7）*Mvy* 1479: sa vitarkavicārāṇāṃ vyupaśamād adhyātmaṃ saṃprasādāc cetasa ekotībhāvād avitarkam avicāraṃ samādhijaṃ prītisukhaṃ dvitīyaṃ dhyānam upasaṃpadya viharati.

8）*Mvy* 1480: sa prīter virāgād upekṣako viharati, smṛtaḥ saṃprajānan sukhaṃ ca kāyena pratisaṃvedayati, yat tad āryā ācakṣate upekṣakaḥ smṛtimān sukhaṃ viharatīti niṣprītikaṃ tṛtīyaṃ dhyānam upasaṃpadya viharati. この対応梵文によれば、本文の「喜への欲から離れ（dga' ba'i 'dod chags dang bral ba)」は「喜から離欲し」の意。

9）btang snyoms dang dran pa yongs su dag pa. 注10の Skt. upekṣāsmṛtipariśuddhaṃ では、「捨（平静）によって念が清浄である」の意とも解せる。

10) *Mvy* 1481: sa sukhasya ca prahāṇād duḥkhasya ca prahāṇāt pūrvam eva ca saumanasyadaurmanasyayor astaṃgamād aduḥkhāsukham upekṣāsmṛtipariśuddhaṃ caturthaṃ dhyānam upasaṃpadya viharati.

浄である…9) 第四禅に入られた…10)。そののち、世尊は第四禅から出て第三禅に［H3a］入られた。第三禅から出て第二禅に入られた。第二禅から出て初禅に入られた。初禅から出て「(11…教化する対象に応じて人々に色身を現す…11)」という三昧に入られた。世尊が「教化する対象に応じて人々に色身を現す」という、その三昧に入られるやいなや、その瞬間、世尊は、煌々ときらめき、光り輝き、普く〔世間を〕照らされた。

I-2 梵天登場

娑婆世界主である梵天は、梵界におられるがごとくに世尊が煌々ときらめき、光り輝き、普く〔世間を〕照らし、偉大な人（仏陀）の三十二相によって飾られているのを見た。見ると、［P2b］梵［H3b］界（*brahmaloka）から消え、(12…あらゆるものを含んだマハーヴァナを光で輝かせて…12)、世尊の面前の、あまり遠くないところに坐った。

I-3 梵天、世尊に出定を要請

そのとき［Zh5］娑婆世界主である梵天はこのように考えた。「諸仏世尊は近付きがたく13)知りがたい。三昧に入っておられる世尊にむかって、私が、(14…痰を吐きかける〔おそれのある〕言葉（*śabda）や〔通常の〕会話ごときで…14)出定をお願いすることは、私のすべきことではなく15)、私は、偈頌によって世尊に出定をお願いするべきである」と。

そこで娑婆世界主である梵天は、偏袒右肩し、坐ったまま世尊にむかって合掌し、礼拝して、世尊に対して偈頌で出定をお願いした。

---

11) gdul bya ji lta ba bzhin du sems can la gzugs kyi lus kun tu ston pa, *yathāvaineyasattvarūpa-kāyasaṃdarśana.

12) thams cad dang ldan pa'i tshal chen po 'od kyis snang bar byas te.

13) bsnyen par dka' ba, *durāsada. ここでは「普通のやり方で接することは許されない」という意味。

14) lud pa bsal ba'i sgra'am, smra ba tsam gyis. lud pa bsal ba は痰や唾などの粘液を除く（払う、吐き出す）こと。

15) bdag gi cha ma yin gyi. 直訳は「私の分ではないが」。cf. *Śikṣ* 104.16: etan na mama **pratirūpaṃ** yad ahaṃ.... Eng.: This is not **proper** that.... Tib.: de ni bdag gi **cha** ma yin no.

1　「汚染されることなく、汚れなく、清らかな方よ、神々と優れた人たちと、ガンダルヴァ・ナーガ・アスラたちは〔あなたを〕尊敬しています。衆生にとっての医薬であり守護者たるあなたに供養しています。

2　例えば山が動くことのないように、あらゆるマーラたちにも動揺することなく、あたかも海がその深さを計りがたいように、人中の雄たる牟尼は、禅定をなされています。

3　飲食〔身〕[16]［H4a］でもなく、〔把握されるべき〕特徴もなく、分析されることもなく、依拠されることもなく、依拠することもなく、現れることもない、正しき人たる牟尼は、禅定をなされています。

4　種々の考察の対象でもなく、愚かな人々の〔理解の〕範囲でもなく、心・心所を越えており、禅定の彼岸に達しておられる方は、禅定をなされています。

5　守護者として獅子のごとく咆哮し、牟尼として雷〔雲〕のごとく〔法の音を〕轟かせ、［P3a］勇者として月のごとくに〔美しく〕飾られた（rab tu mdzes, *upaśobhita）、衆生の宝たるあなたに礼拝いたします」

I-4 出定した世尊に梵天が問う

そのとき世尊は、［Zh6］娑婆世界主である梵天によってなされた、以上のようなこれらの偈頌による懇請がそのお心に伝わり、結跏趺坐なされた状態のまま、かの三昧から出られた。出られてから、世尊は、娑婆世界主である梵天に呼びかけるために、咳払い[17]の音をお出しになると、娑婆世界主である梵天は、世尊がかの三昧から出られて結跏趺坐なされたままでおられるのを見た。見て、世尊のもとに赴き、至ると、世尊のまわりを三度まわって世尊の足に［H4b］頂礼し、一隅に坐った。

一隅に坐ってから、娑婆世界主である梵天は、世尊に次のように申しあげた。

16）zang zing, *āmiṣa. cf. *VKN* 3.45: (dharmakāyās tathāgatā) nāmiṣakāyāḥ. Tib.: kha zas kyis gsos pa'i lus ma yin.

17）mgur bsal(BKL:stsal) ba. mgur(mgul) bsal ba, Skt utkāsana, utkāsita; Pāli ukkāsana, ukkāsita. cf. 五島［2014］47頁 注29。

「(18…もし質問をして、その質問に世尊がお答えしてくださることを私にお許しになるならば、私は正しく悟られ尊敬にあたいする如来にいささか質問がございます…18)」

そう言われて世尊は、娑婆世界主である梵天にこう仰せになられた。

「(19…梵天よ、質問に答えるために如来はいつでもおまえに許可をあたえるので、梵天よ、おまえはどんなことであれ聞きたいことを如来に質問しなさい。質問されたことのそれぞれに答えることで私はおまえの心を和らげてあげよう…19)」

その時、世尊によって許可を与えられた娑婆世界主である梵天は、世尊にこう申しあげた。「世尊よ、［P3b］菩薩大士たちはどれだけの法を具えたら速やかに無上正等覚［Zh7］を悟るのでしょうか」

II 本論「身体に随順する念」を中心とする念処

II-1 身念処

そう尋ねられて世尊は、娑婆世界主である梵天にこう仰せになられた。

「梵天よ、菩薩［H5a］大士たちは一つの法を具えれば速やかに無上正等覚を悟ることになるであろう。一つの法とはなにかといえば、すなわち『身体に随順する念20)』である。梵天よ、菩薩の、『身体に随順する念』とはどのようなものかといえば、梵天よ、この場合、(21…菩薩は『行くのだ』と、念を持って正

18) cf. *Suvi* 3.12–14: pṛccheyam ahaṃ bhagavantaṃ tathāgatam arhantaṃ samyaksaṃbuddhaṃ kaṃcid eva pradeśam, saced bhagavān avakāśaṃ kuryāt pṛṣṭaś ca praśnavyākaraṇāya.

19) cf. *Suvi* 3.15–18: pṛccha tvaṃ suvikrāntavikrāmiṃs tathāgatam arhantaṃ samyaksaṃbuddhaṃ yad yad evākāṅkṣasi, ahaṃ te tasya tasyaiva praśna(sya) vyākaraṇena cittam ārādhayiṣyāmi.

20) lus kyi rjes su song ba'i dran pa (* kāya-anugatasmṛti). 意味は「身体（のありよう）について（一つ一つ吟味し）理解する念（集中力）」。cf. *LV* 150.24.: evaṃ ca bodhisattvaḥ kāye kāyānugatayā smṛtyā viharati sma. 類似の概念を表す表現に kāyānupaśyin, kāyānupaśyanā（随身観）がある。例えば *MN* No.10 (kāyānupassanāsatipaṭṭhānaṃ) 56.11–12: kathañ ca bhikkhave bhikkhu kāye kāyānupassī viharati. *MPN* sec.10.14: kāye kāyānupaśyī viharati. *AKBh* 342.5–6 : kāye kāyānupaśyanā smṛtyupasthānam iti vacanāt. この語は本経でも用いられれている。注54参照。

21) cf. *MN* I 56.36–57.2: puna ca paraṃ bhikkhave bhikkhu gacchanto vā gacchāmīti pajānāti. ṭhito vā ṭhito 'mhīti pajānāti. nisinno vā nisinno 'mhīti pajānāti. sayāno vā sayāno 'mhīti

しくあるがままに知るのである。『戻るのだ』と、念を持って正しくあるがままに知るのである。『横になるのだ』、『立ち上がるのだ』、『歩くのだ』、『坐るのだ』と、念を持って正しくあるがままに知るのである…[21]。

II-1.1 身体の欠点

彼は一人孤独になって[22]、[23…]内に沈潜して（宴坐して）…[23]、苛立つことのない心[24]でこの身体について、次のように、『ああ、この身体は堅固なものではなく、無常であり、本質的に脆弱であり、核心がなく、恒常性がなく、散乱する性質を持ち、壊れる性質を持ち、諸縁によって生じるものであり、幻に似ており、露の滴[25]に似ており、動揺して留まらず、不潔で、膿汁の悪臭[26]があり、[27…]風と太陽に晒されるに至り…[27]、［H5b］腐敗するに至り[28]、塵となるに至り、土埃を究極とする[29]。〔身体は〕病気が多く[30]、害（不利益）をもたら

---

pajānāti. yathā yathā vā panassa kāyo paṇihito hoti tathā tathā naṃ pajānāti.

22) gcig pu dben par ’dug ste, *ekākī rahogataḥ. 具体的には、森（araṇya）、樹下（vṛkṣamūla）、空屋（śūnyāgāra）などの念処修習にふさわしい臥坐所（śayanāsana）に行くことをいう。cf. *MN* I 56.12–13. より詳しい説明は、「沙門果経」第67節（*DN* I 71.15–17）とその注釈を参照。

23) nang du yang dag bzhag nas. *Mvy* 1488: pratisaṃlayanaḥ, nang du yang dag ’jog. *BHSD* pratisaṃlāna (nt.; = °layana, Pāli paṭisallāna), retirement, withdrawal into privacy(for the purpose of meditation).

24) ’khrug pa med pa’i yid. *KP* sec.93: nirupāyāso bhavati. Tib.: ’khrug pa med par ’gyur ro. *BHSD* upāyāsa: irritation. upāyāsa は「憂悩」と訳されたりするが、ここは「冷静、平静（な心）」の対語。

25) zil ba’i thigs pa,*avaśyāyabindu. *LV* 153.6: avaśyāyabinduvad acirasthāyinaḥ.

26) rnag gi dri nga ba, *pūtidurgandha.

27) rlung dang nyi mas mthar gtugs (CDHNP:thug, B:thugs) pa. gtug (pf. gtugs): spṛṣṭa. *MW* √spṛś: to touch so as to hurt, injure, harm. cf. *MN* I 10.25–27: idha bhikkhave bhikkhu paṭisaṅkhā yoniso khamo hoti sītassa uṇhassa jighacchāya pipāsāya ḍaṃsamakasa**vātātapa**siriṃsapa**sam-phassānaṃ**.『中阿含経』: 比丘復當堪忍飢渴寒熱蚊虻蠅蚤虱**風日所逼** .(Taisho Vol.1, 432c8–9)

28) mthar ’drul ba. 直訳は「究極的には腐り」。

29) ngan skyugs kyi mthar thug pa. *TSD* ngan skyugs: purīṣa. *MW* purīṣa: earth, land; (esp.) crumbling or loose earth, rubbish, rubble, anything used to fill up interstices in a wall; feces, excrement, ordure. ここでの purīṣa は mūtra-purīṣa（小便・大便）の意味ではなく、前項の「塵（rdul, rajas）」より細かい「粉々になった土、土埃」の意に取る。

30) nad mang ba. cf. *DBh* 17.1–2 : atha cet punar manuṣyeṣv upapadyate, dvau vipākāv abhinirvartayati alpāyuṣkatāṃ ca bahuglānyatāṃ (Tib.: nad mang ba) ca.

し[31]、併発する病が多く[32]、病み苦しみ（na ba, *vyādhita）、壊れやすく[33]、骨の集積であり（rus pa bsogs pa, *asthisaṃghāṭa）、悪臭があり、[34…〔様々に〕漏出するものがある〔、という〕ことに集中して［Zh8］努力しなければならない…34)』と、正しい念によって正しくあるがままに［P4a］観察する。

II-1.2 身体に対する執着の克服

彼はそのように正しい念によって身体の欠点を正しくあるがままに理解することによって、身体に対する欲望、身体に対する執着、身体を我がものとする考えを起こさない。彼は身体を見ないことによって、生命に対する欲望、生命に対する執着、生命を我がものとする考えを起こさない。彼は身体と生命とを見ないことによって、粗末な衣、粗末な食べ物、粗末な臥具と座具、病気に必要な薬や生活必需品の粗末なものにも満足する。彼は、[35…仲間の修行者たちがなすべきことを…35)、それらが利益あることであれ、善あることであれ、捨て去る[36]。疲倦することなく[37]、意気阻喪することなく[38]、疲倦する心を起こすこともない。

彼は師匠（mkhen po, *upadhyāya）と規範師（slob dpon, *ācārya）のもとに行くとき、念をもって次のように、『師匠がたは近づきがたい（*durāsada）[39]。規範師がたは近づき［H6a］がたい。私がそこに行くとき、[40…私に、悪・不善

---

31) gnod pa can. *Mvy* 2960: anarthopasaṃhitam, gnod pa can nam gnod pa dang bcas pa.

32) ’go ba’i nad mang ba. *Mvy* 9555: upasarga, ’go ba’i nad. 蔵語は「伝染病」の意だが、ここは対応梵語（upasarga）の「ある病に併発して起こる病、余病」の意に取る。

33) ’jig pa’i ngang can. *Mvy* 7502: vinaśvaram.

34) ’dzag pa can bsgrims te rim gro byed(P/BLKPhT:bya) dgos pa yin pa. *TSD* rim gro byed: prayujyayeyu. *BHSD* prayujyate, °ti: (to Skt. pra-yuj-, apply, pass.), *applies oneself*.

35) tshangs pa mtshungs par spyod pa(*sabrahmacārin) rnams kyi bya ba gang dag yin pa .... de dag la.

36) gtong bar (CDHN: stong bar, B: stong par, P: stod par, Ph: ston par) byed de.

37) yongs su mi skyo zhing, *na parikhidyate. cf. *KP* sec.37.

38) yongs su yi chad(’chad) pa med. cf. *Śikṣ* 72.12: tenaivam **aparitapatā** piṇḍāya cartavyam. Eng.: thus, one should go a-begging **without worrying**. Tib.: des de ltar **yongs su yi chad pa med par** bsod snyoms spyad par bya’o.

39) 注13参照。

40) sdig pa mi dge ba kun tu spyod pa ’ga’ zhig gis bdag la glengs shing dran par byas na mi rung ngo. *TSD* gleng ba: ālāpa.

の行いがいささかでもあって、〔師匠方に〕お話をしながら、念をなしているとすれば、〔それは〕相応しくない…40)』と考えて、(41…それを因とし、それを縁とし、それを根拠として…41)、諸々の修行法（bslap pa rnams, *śikṣāḥ）を尊重するであろう。刻苦勉励すること42)、正しくなすべき事（善業）を行うこと43)、寂静を実現すること44)、〔これらのことを〕究極の状態に至らしめること［Zh9］になるだろう。その場合、まさに諸々の修行法を尊重すること、まさに刻苦勉励すること、まさに正しくなすべき事（善業）を行うこと、まさに寂静を実現すること、(45…まさに〔これらのことを〕究極の状態に至らしめることによって…45)、師匠と規範師のもとに行くならば、(46…恐れることなく、怖じけることなく…46)行き、(47…〔同時に〕恐れないことに随伴して生じる浮ついた状態（掉挙）に慣れ親しむこともない…47)。それはなぜかと言えば、尊重の気持ちを持ち、敬意の念を持ちながらも、良家の花嫁48)のごとき恥じらいの気持ち

---

41) rgyu de dang rkyen de dang gzhi des. 直訳は「その因とその縁とその根拠によって」。

42) rtun(brtun) par byed pa. *Mvy* 1805: ātāpī, rtun pa. *Mvy* 1806: ātaptakārī, brtun cing byed pa.

43) legs par bya ba byed pa nyid, *sukṛtakarmakāratā, *samyakkriyākāratā.

44) zhi ba rnal du byed pa nyid. cf. デルゲ版『修習次第・中篇』D 48a3:dmigs pa de la sems rnal du ’jug par mthong ba de’i tshe....（一郷［2011］77頁 : その対象に対して心が平静な状態になっていることが見られるときには……。）

45) shin tu yongs su mthar thug par byed pa nyid kyis.

46) bag tsha ba med pa dang bag ’khums(’khum) pa med pa. cf. *Asp* 3.22–23: cittaṃ nāvalīyate na saṃlīyate **na viṣīdati na viṣādam āpadyate** .Tib.: sems mi ’gong, kun tu mi zhum, **bag mi tsha, bag ’khums par mi ’gyur**. 下線部の梵文は「失望せず、落胆に陥ることなく」の意。

47) mi ’jigs pa dang lhan gcig(cig) tu byung ba’i rgod pa ’ang(yang) mi sten (CDHP:ston, Ph: rten, B:brten) te. *Mvy* 1979: auddhatyam, rgod pa, 掉挙. sten(*ā √ sev) は、繰り返し行う、慣れ親しむの意。善なるものであれば「修習する」、不善なるものであれば「惑溺する」と、訳し分けるべき語。

48) rigs kyi bag ma, *kula-vadhū. cf. *Bcvp* : sthāpyo navavadhūvṛttau hrīto bhīto ’tha saṃvṛtaḥ (ch.8,v.166cd).「恥じらい深く、臆病に、内気に、花嫁の状態にあらしむべきである」（金倉［1965］159頁）。興味深いことに *Śikṣ* の漢訳（「大乗集菩薩学論」）には「如梵天所問経云. 応知菩薩者譬若新婦.(T1636,vol.32, 99b13–14)」とあり、その蔵訳にも “de skad tshangs pas zhus pa’i mdo las kyang, bag sar (*Mvy* 3919: navavadhū, bag (ma) gsar (pa)) bzhin du bya’o zhes gsungs so”. (D 72a4) とある。梵文では “tathā brahmaparipṛcchāyām apy uktaṃ: ‘na ca vadhakasadṛśena bodhisatvena bhavitavyam’ iti”(Vaidya 70.24–25). となっているが、漢訳・蔵訳に従えば ‘na ca vadhakasadṛśena’ を ‘navavadhūsadṛśena’ または、‘navavadhukāsadṛśena’ とすべきであろう。この方が引用箇所の前後の文脈に合うからである。なお、「花嫁」の比喩は、Brahmaviśeṣacintiparipṛcchā (Tohoku No.160) には見られない。 cf. 五島「修士論文（1979年）」（副論文「Brahmaviśeṣacintiparipṛcchā を引用する論書・注釈書」）50～51頁。

（’dzem pa, *hrī）を持っているからである。［P4b］その場合、恥じらいの気持ち（羞恥心）をもつことによって身体の欠点と身体の悪行というものをすべて、すっかり捨て去るのである。

II-1.3 身体の悪行とその克服

梵天よ、菩薩にとっての身体の欠点と身体の悪行とはなにかといえば、梵天よ、生き物を殺すこと（srog gcod, *prāṇātipāta 殺生）が、菩薩の身体の欠点と身体の悪行である。梵天よ、［H6b］与えられていないものを受け取ること（ma byin par len pa, *adattādāna 偸盗）と、純潔ならざる行い（mi tshangs par spyod pa, *abrahmacarya 邪婬）が、菩薩にとっての身体の欠点と身体の悪行である。

梵天よ、菩薩はどのようにして殺生（生き物を殺すこと）を断つのかといえば、梵天よ、この場合、菩薩は、欲望（’dod chags, *rāga）故に殺生することはしない。怒り（zhe sdang, *dveṣa）故に、そして愚かさ（gti mug, *moha）故に殺生することはしない。彼は他の生き物（sems can, *sattva）や他の人間（gang zag, *pudgala）に対して自分と同じだとの思いをなし、愛しいものだとの思いをなす。自分自身が他の生き物、他の人間を殺生することはしない。他人に殺生させることもしない。他人が殺生するのを喜ぶこともしない。自分自身が傷つけることはしない。他人に傷つけさせることもしない。他人が〔誰かを〕傷つけることを喜ぶこともしない。自分自身が殴打することはしない。他人に殴打させることもしない。他人が［Zh10］〔誰かを〕殴打することを喜ぶこともしない。

どのようにして与えられてはいないものを受け取ること（偸盗）を捨てるのかといえば、梵天よ、この場合、菩薩は、人々の生活の資具（’tsho ba’i yo byad, *jīvitopakaraṇa）、つまり、金、摩尼、真珠、琉璃、螺貝、玻璃［H7a］、珊瑚、真金、銀など、衣服、様々な種類の装身具[49]、財宝、穀物、貯蔵所、倉庫〔などの〕様々なものに欲望を起こさない。それらに対して妄想をなさず、

49) rgyan gyi rnam pa dag.

盗むことをしない。［P5a］〔他人に〕盗ませることをしない。〔他人が〕盗むことを喜ぶことをしない。彼は村にある、あるいは森にある、与えられたものでも許可されたものでもない草の葉さえも取ることはしない。

どのようにして、純潔ならざる生活を捨てるのかといえば、梵天よ、この場合、菩薩は感官の門をよく守って生活し、よく抑制し（legs par bsdams pa, *susaṃvṛta）、(50…正当な生活において行動し…50)、しっかりと守られた念を持ち、常に守られた念を持っている。彼は、念によって心（意）を防御し、身体と言葉をしっかりと抑制するのである。正当な生活において行動するとき、念を持ちながら次のように考える。『(51…ある人がよく熱せられた微細な砂を両の手のひらで受けて、両眼一杯に〔入れる〕ことは容易だとしても…51)、〔私は〕愛欲の心で国一番の美女[52]を見るようなことはしない。なぜなら、私が国一番の美女を見たことで、長い間、〔彼女に〕(53…傷つけられ［H7b］圧倒される…53)ことはふさわしくないからである』と。彼はそのように(54…身体について身体に［Zh11］即して見つつ…54)、食べ物、飲み物、住まい、臥具、座具に対して念をしっかりと留め、それらを享受するとき、耽溺する（ro myang ba, *āsvāda）ことはなく、愛着する心もないのである。

II-1.4 身体と感受の関係

もし彼が享受（*paribhoga）するとき、楽の発生を見るならば、彼は、それについて次のように吟味（nye bar brtag pa, *upaparīkṣaṇa）しなければならない。〔つまり〕『楽として現れているこれは、煩悩（bzlog pa, *nīvaraṇa）の門に由来する苦である。この三界には、形成された事物（*saṃskṛtavastu）で楽なものなど何もないのである。なぜなら、形成されたもの（有為）は無常だか

50) mthun(’thun) pa’i gnas su rgyu ba yin. *Mvy* 2365 pradakṣiṇa-grāhī, mthun(’thun) par ’dzin pa.

51) mi zhig gis bye ma zhib mo shin tu bsregs(T:bsrogs) pa lag pa gnyis kyi snyim pas blangs(C:blang) te mig gnyis (CDHNP omit:gnyis) bkang ba ni(CN:na) sla’i(P/BLPhT:bla’i).

52) yul gyi bzang mo, *janapadakalyāṇī. *Mvy* 7630.

53) phung (pf. of ’phung ba) zhing bcom.

54) lus la lus kyi rjes su lta zhing, *kāye kāyānupaśyamāna.

らである。およそ賢者たるものは[55]、無常なる事物に対して楽の思いなどどうして起こしたりしようか』と吟味すべきなのである。

梵天よ、もし菩薩が享受するとき、苦ばかりが生じて楽はなく、その苦によって［P5b］傷つけられ汚されるのであれば、彼はそれについて、[56…]次のような心に〔念（集中力）を〕留めるべきである[…56]。『この身体は、[57…]努力して防御しなければならない[…57]。[58…]賄賂によって籠絡されてしまう〔看守のような〕ものである〔から〕[…58]。これ（身体）は、苦の場合は維持され得ないが、楽の場合は維持されるものである。私の身体は堅固であり、この生によって[59]善なる諸法を完成すべきである。[60…]たとえば、収益を欲する商人が何カーリーもの〔量の〕荷物、それに対して何千人もの奴隷を［H8a］準備するのは[…60]、何カーリーもの荷物を飾りとするためではなく、楽するためでもなく、他のところにまで何カーリーもの荷物を運ぶためである。それと同じように、菩薩は食べ物を食べはするものの、身体を飾るために食べ物を食べるのではなく、身体を楽にするためにでもなく、[61…]ほかのところにまで身体に結びついた善分（dge ba’i phyogs, *kuśalapakṣa）を渡すためである[…61]』と〔念（集中力）を〕

---

55) mkhas pa’i rang bzhin can. cf. Yoshiyasu [2008] 242.10: paṇḍitajātīyena puruṣeṇa, 243.15: skyes bu mkhas pa’i rang bzhin can gyis.

56) des de la sems ’di ltar nye bar gzhag par bya ste.

57) bsgrims(BLPh:bsgribs) te yongs su bskyang(Ph:skyong, DP:bskyed) dgos pa.

58) gsug gis bsgrub dgos pa ste. cf. *Śikṣ* 125.6 : (ayaṃ kāyaḥ ....) cārakapālavad utkocasādhyaḥ. Eng.: (the body is) open to bribes like a jailor. Tib.: btson srung ltar gsug gis bsgrub par bya ba dang.

59) ’tsho ba ’dis.

60) dper na, rnyed pa ’dod pa’i tshong pa khur khal rnams stong(DP/KLT:stod, B:bston) bran byed(H/BKPh: /) bcos legs byed pa ni. khur khal は2語で「荷物」と解せるが、ここはkhal(Skt. khārī) という量の単位に解した。*TSD* khal: khāra, khārī, khārīka. cf. *Asp* 258.26–27: tasmai divyaṃ khārīsahasraṃ divyānāṃ māndāravapuṣpāṇām upanāmayati sma. 梶山［1975］（注237）によれば「カーリー khārī は量の単位。18ドローナで、およそ3ブッシェル」とする。bcos legs byed pa については以下の文献を参考にした。*Śikṣ* 125.4: jīrṇagṛhavat **pratisaṃskāra**dhāryāḥ, jīrṇayānapātravat **pratisaṃskāra**vāhyaḥ. Eng.: like an old house to be propped up by repairs, like an old boat to be patched up. Tib.: khang rnying ltar **bcos legs bya** zhing brten pa dang, gru rnying ltar **bcos legs bya** zhing spyad pa dang.

61) gzhan du na ji tsam lus dang ’brel pa’i dge ba’i phyogs bsgral ba’i phyir ro. *TSD* bsgral ba: tāraṇa, saṃtāraṇa. cf. *Śikṣ* 72.1–2 : tena taṃ piṇḍapātaṃ paribhujya **kuśalapakṣā**bhimukhena bhavitavyam.Tib.: de bas na bsod snyoms de zos nas **dge ba’i phyogs** la mngon du phyogs par

留めるべきである。

II-2 心念処

梵天よ、もし菩薩が、［Zh12］如来がお語りになった対処法（gnyen po, *pratipakṣa）では心を知ることができない場合、彼は次のように考えるべきである。『心というこれは、究めることがむつかしく、[62]…正当に把握することはない…[62]。輪廻においては現前し（mngon du phyogs pa, *abhimukha）、善分（*kuśalapakṣa）においては現れない（mi phyogs pa）。対象に対しては現前するが、遠離[63]においては現われない。楽においては現前するが、苦においては現れない。会話（smra ba）を喜ぶところには現前するが、[64]真理（de kho na, *tattva）を見るところには現れない。不浄なところには現前するが、清浄なところには現れない。制御しがたく、つかまえにくく、止まることがない。よりどころがなく、虚無で（*tuccha）、虚しく（*rikta）、刹那のものであり、[65]…因と縁の集まりから生じるのであって…[65]、たとえ賢者［H8b］たるものであっても、このような性質を持つ心に支配され、随従するものである』と考える。彼はこのように、心に念（集中力）を留めること（*smṛtyupasthāna）によって、心を調御すべく修行するのである。［P6a］

II-2.1 布施の修習

彼はもの惜しみ（ser sna, *mātsarya）の心を調御するために布施を行う。たとえ一口（kham, *ālopa）ばかり〔の食べ物〕であれ、棗（rgya shug, *badara）ほどのものであれ、豆（mon sran gre’u, *māṣa）ほどのものであれ、ゴマの実（til ’brul, *tila）ほどのものであれ、彼はあらゆるものを布施するが、〔それは〕好ましい人に〔だけ〕ではなく、親しい人に〔だけ〕でもない。

---

bya’o.

62) mi mthun(’thun) par ’dzin. cf. Yonezawa[2008] 234.4: apradakṣiṇagrāha, 235.7–8 : mi mthun par ’dzin pa.

63) D/BLT: dben(*viveka). CHNP/KPh: bden(*satya).

64) BKLT add one phrase: spros pa(*prapañca) la mngon tu phyogs pa.

65) rgyu dang rkyen tshogs pa las byung ba yin na.

II-2.2 持戒の修習

彼は悪い習慣のついた心[66]を調御するために戒を守って、身・口・意の欠点がないようにし、〔それらが〕混じり合わないようにし[67]、汚れたものにならないようにする[68]。その戒によって、自らを誉めることもせず、他人をけなすこともしない。

II-2.3 忍辱の修習

彼は悪意ある心（gnod sems, *vyāpāda）を調御するために忍辱を修習する。彼は村や町に入ったとき、罵倒されてもなんとも思わない。痛めつけられても、殴打されても、脅迫されて［Zh13］も、蹂躙（rnam par ’joms, *vidhvaṃsana）されても、非難されても、なんとも思わない。[69…]『ああ、この沙門は禿頭（mgo reg ngan pa, *muṇḍaka）だ。ああ、この沙門はひどくくみにくい禿頭だ』[…69]と世間の人から誹謗されてもなんとも思わない。事実ではないことで中傷されても、忍辱を［H9a］行って〔それに〕耐えて、自らの業によるもの（las bdag gir bya ba nyid, *karmasvakatā）と信じる。この忍辱によって自分を誉めることもせず、他人をけなすこともしない。

II-2.4 精進の修習

彼は、怠慢（le lo, *kausīdya）の心を調御するために、まだ得ていない菩提分法を得るために、得たものを増大させるために、増大したものを熟させるために、熟したものを正しく保持するために、正しく保持しているものを〔身心に〕配分する（rnam par dbye ba, *vibhakti）するために、精進を行う。彼は衆生たちのためになること、衆生たちに対してなすべきことにおいて、疲倦することなく、意気阻喪することなく[70]、疲倦の心を起こさない。彼は、チャン

---

66) ’chal ba’i tshul khrims kyi sems.

67) ’dren mar mi byed pa yin. *AKBh* 192.7: avyāmiśrakārin, Tib.:’dren mar byed pa ma yin pa.

68) nag nog can du mi byed pa yin te. *TSD* nag nog: kaluṣa.

69) cf. *Divy* 24.11–13. sa saṃlakṣayati—amaṅgalo ’yaṃ muṇḍakaḥ śramaṇako mayā dṛṣṭa iti viditvā ....「彼（ある猟師）は〔プールナを〕見かけた。〈俺が禿頭の沙門に会うとは、不吉なことだ！〉と彼は考えた」（平岡［2007］77頁）

ダーラを助けるときであれ、王を［P6b］助けるときであれ、非常に遠い道でも出かけて行き、〔両者の〕違いを見ることなく、〔そうしようとする心の〕流れを断つこともない。もし菩薩に、苦しく貧しい人が、(71…みすぼらしく貧弱なあるもの…71)を施与した[72]場合、あるいは、誰かある裕福で財産の多い人が、めでたくて卓絶し、満足できるある物を施与した場合、それに対して、菩薩は、憐憫（snying brtse, *anukampā）の心を起こして、敬意をもって讃えつつ［H9b］激励して[73]、鼓舞しつつ[74]、そのみすぼらしい方を受け取るべきである。なぜなら、特に[75]、〔現に今〕苦しんでいる人にとって、この布施は、布施するということ〔自体〕が困難なものだ［Zh14］からである。

II-2.5 禅定の修習

彼は散乱した心を調御するために禅定を修める。どのように禅定を行うのかといえば、梵天よ、この場合、菩薩は、何よりも先ず、身体をよく抑制する。身体を遠離した状態にしておく。〔女性の〕身体との接触[76]を捨離する。身体に対する執着（lhag par chags, *adhyavasāna）を放棄する。(77…身体が重いのか、軽いのかを知る…77)。(78…身体に随伴するもの、身体の営み、身体の力を認識する…78)。言葉をよく抑制して、発語（smra ba）を少なくし会話（brjod pa）も少なくする。意味を語る者であり、道理（rigs）を語る者であり、おしゃべり（bre mo’i gtam, *pralāpa）を好むことを放棄する者である。彼は、心（意）を

---

70) yongs su yi mi chad de. 注38参照。
71) dngos po tha chad(*pratikruṣṭa, CDHNP/Ph: thams cad for tha chad) ngan pa zhig.
72) KLPhT: bstabs(pf. of stob pa, to offer something), CDHNP: gtams, B:bsdabs.
73) yang dag par gzengs bstod. *Mvy* 6834: samuttejanam.
74) yang dag par ’dzin du gzhug cing. *Mvy* 6833: samādāpayanti.
75) ’di lta ste, *yaduta. *BHSD* ***because, of course, and that too****, with implication of* ***especially, particularly****.*
76) lus kyi ’du ’dzi rnams (*kāyasaṃsargāḥ). *Mvy* 8370 kāyasaṅsarga, lus kyis reg pa. cf. *Krp* 168.19–169.1: na ca tatra manuṣyā mātṛgrāmeṇa sārdhaṃ maithunakāyasaṃsargam āpadyeyuḥ.
77) cf. *Śikṣ* 72.1: ati**gurukāyo** middhāvaṣṭabdho bhavati. *Śikṣ* 72.24–25: lūhāhāratayā me **laghuḥ kāyo** bhaviṣyati, prahāṇakṣamaḥ, uccāraprasrāvaniṣyandanaś ca me parītto bhaviṣyati.
78) lus dang mthun(DP/KLT: ’thun) pa dang, lus ’tsho ba dang, lus kyi stobs(B:stabs) kyang rab tu shes so.

よく抑制する者であり、不善への思い（rnam par rtog pa, *vikalpa）をすべて放棄する。彼はそのように〔身・口・意の〕三つの条件（gnas, *sthāna）を清浄にすることで、(79…青・黄・赤・白〔などの〕の〈いろ・かたち（gzugs, *rūpa）〉が現れないようにと修行する…79)。〔もし、それらが現れた場合、〕それらに対しては(80…特徴（*lakṣaṇa）をとらえず、徴表（*vyañjana）もとらえない…80)。さまざまな種類の飾りや衣服に対しても、特徴を［P7a］とらえず徴表［H10a］もとらえない。さまざまな色・声・香・味・触に対しても、特徴をとらえず徴表もとらえない。男・女・少年・少女たちに対しても特徴をとらえず徴表もとらえない。

彼は一人孤独になり、内に沈潜して（宴坐して）心を安定させるために[81]修行を行う。好ましくないもの（*apriya）を対象とする（dmigs pa）のであれ、慈（*maitrī）を対象とするのであれ、悲（*karuṇā）を対象とするのであれ、離欲の思いさえあればよく[82]、［Zh15］身体について思い上がること（khengs pa, *unnati）のないように、そのように見る（dmigs par byed, *upalabhate）。息の出入（*āna-apāna）を阻害せず、〔心の〕流れも断たない。〔身中の〕風は乱されず、心が顛倒して乱されるということもない。彼は、歩いていても横になっていても、立っていても坐っていても、(83…まさに同じ対象とともにある…83)。(84…同じものに心を向けるのである…84)。

梵天よ、菩薩が対象に心を固定しているとき、(85…心を対象として心が三昧に入る〔ことになる〕が…85)、心が心を見ることはない。〔なぜなら〕(86…三昧に入

---

79)『倶舎論』（*AKBh* 6.8–10, Taisho vol.29 2b26–28）によれば、色処（rūpa-āyatana）は「いろ（varṇa）」と「かたち（saṃsthāna）」の２種からなり、「いろ」はさらに、青・黄・赤・白の４種、「かたち」は長・短・方・円・高・下・正・不正の８種からなるとする。

80) mtshan mar mi ’dzin mngon rtags su mi ’dzin to.

81) sems gnas par bya ba’i phyir, *cittasthirīkaraṇāya. cf. 一郷［2011］29頁９行目。

82) yid ’byung bar ’gyur ba gang yang rung ba. cf. *Sikṣ* 140.28: duḥkhena na **virajyate**, Tib.: sdug bsngal bas **yid ’byung bar ’gyur ba’**ang med. *PED* vilajjati: to detach oneself, to free oneself of passion, to show lack of interest in (loc.).

83) dmigs pa de nyid kyis ’dug go.

84) de nyid la sems gtod do(HN/KLPhT: gtong ngo, P/B:gtang ngo).

85) sems la sems mnyam par ’jog ste.

86) gang gis mnyam par ’jog pa de’ang(yang) mi dmigs so. gang gi phyir mnyam par ’jog pa

る主体（心）も〈見る〉ことはないし、三昧の対象となるもの（心）も〈見る〉ことはない…86)〔からである〕。彼は［H10b］次のように考える。『ああ、これらの愚かな凡夫たちは、虚無なもの、虚しいものに執着している』と。これを菩薩の観（*vipaśyanā）という。そのように見ることによって煩悩が生起することもなく、活動することもないことを菩薩の止（*śamatha）という。

梵天よ、さらにまた、菩薩は、一人孤独になって内に沈潜して（宴坐して）のち、(87…聞いたとおりの名称（*nāman）と文字（*akṣara）とを〈ことばの分析（*nirukti)〉によって概念設定し、確立して、それらの文字を観察検討（*upaparīkṣaṇa）する…87)。［P7b］彼がそのように観察しているとき、文字を虚無なもの、虚しいものとして見る。彼は文字を虚無なもの、虚しいものとして見てのち、名称もまた虚無なもの、虚しいものとして見る。あるものにその名称が概念設定されているとき、それを虚無なもの、虚しいものとして見る。その場合、およそ〈いろ・かたち〉として現れるものの一つ一つを、虚しいものとして見る。それを虚無なもの、虚しいものとして見ることによって、正しくあるがままに理解するであろう。［Zh16］正しくあるがままにに理解することによって、彼には、形成されたもの（有為）は夢と同じものとして現れる。その場含、菩薩は観察（*pratyavekṣā）してのち、衆生を見ることによって大悲の心に〔念（集中力）を〕留め続ける。

II-2.6 智慧の修習

彼は［H11a］、低級な知88)〔に染まった〕心を調御するために、智慧（*prajñā）の修習を行う。どのように修習するのかというと、彼は、世俗（*saṃvṛti）の道理（*naya）として語られた、あるいは、真実義（*paramārtha）の道理として語られた経典を、(89…明確で完璧な言葉によっ

---

de’ang(yang) mi dmigs so.

87) ming dang yi ge ji(K omits:ji, B:ci) ltar thos pa rnams nges pa’i tshig gis (CDHNP/L:gi, K omits:gi, gis) gdags pas(K:par) yang dag par ’jog cing yi ge de dag la nye bar rtogs te (P/BKT:rtog ste, Ph:rtog te, L:rtog pa ni).

88) ’chal ba’i shes rab. *Mvy* 2470: duṣprajñāḥ, shes rab ’chal ba, 劣慧 .

89) brjod pa gsal zhing zur phyin pa dag gis. *TCD* zur phyin: mthar phyin, 徹底 , 具備 , 周密 .

て…[89] 間違うことなく〔的確に〕理解する[90]。間違うことなく〔的確に〕法の説示を理解してのち、間違うことのない素直な意欲（*āśaya）で考察する。修習の実践に励む。

II-3 智慧による法念処

彼は知の力と優れた智慧によって、[91]…〔誤って実在視される〕衆生（*sattva）を認識せず、生命（*jīva）を認識せず、養育者（*poṣa）を認識せず、個人（*puruṣa）を認識せず、人格（*pudgala を認識せず、人（*manuja）を認識せず、人間（*mānava）を認識せず…[91]、断滅論（*ucchedadarśana）に陥ることは絶対に[92]ない。概念設定（*prajñapti）されたことば（*vyavahāra）を的確に修得する。

彼は、知覚される[93]地の要素（*dhātu）と知覚されない地の要素とを正しい智慧によって、一対のものとして（tshul cig tu, *ekanayena）観察する（*pratyavekṣate）。知覚される水の要素、火の要素、風の要素と、知覚されない〔水、火、風の要素〕を正しい智慧によって、一対のものとして観察する。彼は〔知覚されるものと知覚されないものの〕両者を虚無なもの、虚しいもの

---

mthar phyin: pariniṣṭhita, niṣṭhitagata (perfected, thorough, finished, accomplished).

90) ma nor bar (P/BKT:mngon par) ’dzin to.

91) 『シクシャーサムッチャヤ』第13章「念処章」には法念処について宝髻経から以下の一節が引用されている。*Śikṣ* 127.20–23: iha kulaputra bodhisatvasya **dharme dharmānupaśyanā-smṛtyupasthānena viharata** evaṃ bhavati. dharmā evotpadyamānā utpadyante. dharmā eva nirudhymānā nirudhyante. na punar atra kaścid ātmabhāve sattvo vā jīvo vā jantur vā poṣo vā puruṣo vā pudgalo vā manujo vā, yo jāyate vā jīryate vā cyavate votpadyate vā. eṣā dharmāṇāṃ dharmatā.

92) thams cad kyi thams ced du, *sarveṇa sarvam. *BHSD* sarveṇa: *altogether*; this is commonly emphasized by addition of a variety of other adv. forms in mg. *absolutely altogether*, *in the most complete way*: esp. sarveṇa sarvam.

93) zin pa, *upātta. upātta の原義は「執受される（received, accepted, acquired, gained, seized....)」の意。『倶舎論』の定義に従えば、「心・心所によって〔その依拠する〕座となるものとして、執持されているもの〔ということ〕で、……それは、世間一般には、「感覚ある」と言われているものである」（櫻部［1969］202頁）*AKBh* 23.16–17: yac cittacaittair adhiṣṭhānabhāvenopagṛhītam .... yal loke sacetanam ity ucyate. 以下に言及される地水火風の四元素に即して言えば、知覚を起こさせる（つまり、知覚される）元素と知覚を起こさせない（つまり、知覚されない）元素に分けられる、ということ。

として見、感覚のないもの（*jaḍa）、中身のないもの（*asāra）、空なるものとして見る。［H11b］彼はそのように見ることで、外の諸要素に対して執着［P8a］することがないのと同じように、内〔の諸要素〕に対しても同様である。眼識と色を正しい智慧［Zh17］によって一対のものとして観察する。耳識と声、鼻識と香、舌識と味、身識と触も、正しい智慧によって一対のものとして観察する。彼は地の要素を堅さ（*khara）として知るが、湿り気（*sneha）、温かさ（*uṣṇatā）、内空[94]としても知る。水の要素を湿り気として知るが、堅さ、熱さ、内空としても知る。火の要素を温かさとして知るが、堅さ、湿り気、内空としても知る。風の要素を動き（*samudīraṇatva）として知るが、軽快にして動くこと（*laghusamudīraṇatva）としても知る。彼は虚空の要素を内空として知るが、遍在する[95]ものとしても知る。識の要素を幻のごときものとして知るが、顛倒したものとしても知り、不顛倒のものとしても知る。彼は眼［H12a］識を空として、色を無常なるものとして知る。耳識を空なるもの、声を無常なるものとして、鼻識を空なるもの、香を無常なるものとして、舌識を空なるもの、味を無常なるものとして、身識を空なるもの、触を無常なるものとして知る。

彼はそのように、智慧に通暁しているがゆえに、優れた洞察力[96]のある智慧を有し、鋭い智慧を有して、不善なる法を知り、善なる［Zh18］法を知り、声聞を成就（*samudāgata）させる法をも知り、［P8b］独覚を成就させる法と、菩薩を成就させる法と、他ならぬ仏陀性を成就させる法をも知るのである。彼は不善の法の小、中、大の異熟によって、衆生が、地獄、畜生、餓鬼に生まれることを知り、そこに生まれた者たちの小、中、大の感受（*vedanā）を

---

94) khong stong, *suṣira, *śuṣira. ここでいう内空の具体例については以下の資料が参考になる。*Śikṣ* 133.14–18: ādhyātmika ākāśadhātuḥ katamaḥ. yat kiṃcid asmin kāye ’dhyātmaṃ pratyātmam upagatam upāttam(Tib.: zin pa) ākāśagatam ihābhyantarasaṃkhyābhūtaṃ. asphuṭam aspharaṇīyaṃ tvaṅmāṃsaśoṇitena. tat punaḥ katamat. yad asmin kāye cakṣuḥ **suṣiram**(Tib.: **khong stong**) iti vā yāvan mukhaṃ vā mukhadvāraṃ vā kaṇṭhaṃ vā kaṇṭhanāḍyo vā, yena cābhyavaharati yatra cāvatiṣṭhate, yena cāsyāśitapītakhāditāsvāditam adhastāt pragharati. ayam ucyatae ādhyātmika ākāśadhātuḥ.

95) thams cad du song ba, *sarvatraga.

96) shin tu rtogs pa, *supratividdha, *nidhyapti.

［H12b］知る。善なる法の小、中、大の異熟によって、神々の中へと、あるいは人間の中へと熟することを知り、そこに生まれた者たちの小、中、大の果報を知る。声聞を成就させる諸法の、預流果の現観（*sākṣātkāra）、一来果の現観、不還果の現観、阿羅漢果の現観の相（rnam pa）を知り、慧解脱（*prajñāvimukti[97]）と俱分解脱[98]を知る。独覚を成就させる法によって〔独覚が〕成就することを知り、〔その〕果報と寂静の境地（*śāntatā）を知る。菩薩を成就させる法の集成（tshogs *saṃcaya）の道を知り、知の道を知る。知って後、〔法の〕集成の道と知の道への［Zh19］努力を重ねる。[99…]仏陀性を成就させる法の大神通性[…99]をも知る。大威力性（mthu che ba nyid）と真実性（dam pa nyid）と最勝性（rab mchog nyid）と最高性（phul du byung ba nyid）と最大性（che[H13a] ba nyid）、それに、[100…]すべての声聞・独覚・菩薩の特殊〔性〕は勿論のこと、あらゆる衆生の特殊性（*asādhāraṇatā）を知ることは言うまでもない[…100]。

彼はそのように、諸法を〔それぞれの〕法に即して見て〔そこに〕念（集中力）をしっかりと留め、すべての悪法から離れて善法を獲得する。[101…]身体が傷つけることはなく、識に牽引されることもなく、心に牽引されることもない状態で[…101]、諸法の因の集積（tshogs）と〔その〕果を正しくありのままに知ることによって、たとえば海の波のように、善法が増大する。〔ただし、〕海の

---

97) shes rab kyis(CDHN/BL: kyi) rnam par dgrol ba(K omits this phrase). kyis の場合は、「智慧の働きによって解脱すること」、kyi の場合は、「智慧が（無明などから）解脱すること」の意になる。

98) gnyi ga'i cha las rnam par grol ba, *ubhayatobhāgavimukta. 俱分解脱については『俱舎論』第 6 章第64ab 偈の世親釈が参考になる。*AKBh* 381.3–4 : yo nirodhasamāpattilābhī sa ubhayatobhāgavimuktaḥ. prajñāsamādhibalābhyāṃ kleśavimokṣāvaraṇavimuktatvāt.（滅尽定を獲得した者が俱分解脱者である。慧の力によって煩悩障から、定の力によって解脱障から解脱しているからである。）

99) sangs rgyas nyid yang dag par 'grub par byed pa'i chos rnams kyi rdzu 'phul che ba nyid.

100) nyan thos dang rang sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad dang thun mong pa yang (HN/T: 'ang) ma yin na, (Ph:no.) gzhan sems can thams cad lta smos kyang ci dgos(B:gos) pa'i thun(Ph:mthun) mong ma yin pa nyid kyang rab tu shes so. *TSD* lta smos kyang ci dgos: kim punaḥ, prāg eva. *TSD* thun mong ma yin pa: asādhāraṇa.

101) lus kyi(Ph:kyis, K omits: lus kyi) gnod(K:nod) pa ni med, rnam par shes pas(B :pa mi for pas) 'phangs(B: 'phongs) pa ni med, sems kyis(B:kyi) 'phangs(B: 'phongs) pa ni med la.

波は下がったり上がったりするが、菩薩は諸法という点でそのようになることはない。彼は、たとえば白分の月（*śuklapakṣacandra）の月輪（*candramaṇḍala）のように、善法が増大する。〔ただし、〕黒分（*kṛṣṇaśpakṣa）における月輪は小さくなる性質があるが、菩薩は諸法という点でそのようになることはない。たとえば雨期における渓流の増水[102]のように、法が増大する。〔ただし、〕渓流の増水は雨期が［H13b］おわると小さくなる性質があるが、菩薩は諸法という点でそのようになることはない。梵天よ、そのように修得し終えた（bslabs pa）菩薩は、すみやかに無上正等覚を［Zh20］得る」

III　結び

III-1 念処の総括

そのとき、世尊は以下の偈頌をのべられた[103]。

1　「身体の欠点を知るならば、[104…身体にある欠点に慣れ親しむことはない…104]。身体に念をしっかりと留めるならば、欠点のない寂静の境地（gnas）を得る。

2　身体の欠点を知らないならば、身体に存在する欠点を理解しない。身体に念をとどめないならば、耐えがたい苦しみの境涯（gnas）を得る。

3　心の欠点を知るならば、心にある欠点［P9b］に慣れ親しむこと[105]はない。心に念をしっかりとどめるならば、欠点のない寂静の境地を得る。

4　心の欠点を知らないならば、心にある欠点を理解しない。心に念をとどめないならば、耐えがたい苦の境涯を得る。

---

102) phu chu brug (Ph:’brug). *Mvy* 4186 niḥsaradhārāh, phu chu’i rgyun,（和）上流の源. 蔵語の phu chu は谷の上流から流れ落ちる川、brug は長雨などで川の流れが膨れ上がること、を意味する。

103) 本経の特徴だが、以下のいわゆる「念処」のまとめの偈でも、受念処への明確な言及はない。

104) lus yod(CNP:yid, B:omitted) skyon (B adds:ni) rnams mi sten(CDHN/BKLT:ston, Ph:rten) to. sten(*ā √ sev) については注47参照。

105) CDP/T:sten, KLPh:rten, N/B:stan, H:ston.

5　善法に慣れ親しみ[106]、不善法に慣れ親しむことのない[107]、諸法に巧みな人（賢者）は、欠点のない寂静の境地を得る。

6　善法に慣れ親しまず[108]、不善法に慣れ親しみ[109]、諸法に巧みでない人（愚者）は、耐えがたい苦の境涯を得る」

III-2 この経の要約

そのとき、娑婆世界主である梵天は、天華であるマンダー［H14a］ラヴァを化作して、世尊に振りかけた。振りかけると、世尊が述べられた言葉を喜び、随喜して、世尊のまわりを三度まわって世尊のもとに赴いた。

そのとき、世尊は夜が明けたことをお知りになって、比丘の集団の中央に設けられた座に坐られた。坐られると、世尊は比丘たちに仰せになられた。

「比丘たちよ、今宵のことだが、夜の中更（中夜）において、私は一人孤独になって、内に沈潜して（宴坐して）いたとき、［Zh21］娑婆世界主である梵天が、あらゆるものを含んだマハーヴァナを光で輝かせて、私のところにやってきた。やってくると、私を称讃し、三度まわって一隅に坐った。一隅に坐ると、娑婆世界主である梵天は、私にこう言った。

『もし質問をして、その質問にお答えしてくださることを世尊が私にお許しくださるならば、正しく悟られ尊敬にあたいする如来・正等覚者に私は［P10a］いささか質問がございます』

比丘［H14b］たちよ、そのように言われて私は、娑婆世界主である梵天にこう言った。

『梵天よ、質問に答えるために如来はいつでもお前に許可をあたえる。梵天よ、お前は、どんなことであれ如来に質問しなさい。質問されたことの一つ一つに答えることで、私はおまえの心を和らげてあげよう』

そこで、私によって許可を与えられた娑婆世界主である梵天は私にこう言っ

106）DHP/BLT:sten byed, CN:ston byed, KPh:rten byed.
107）CDHNP/LT: mi sten pa, KPh:mi rten pa, B:omitted.
108）CDHNP/BLKT:mi sten, Ph: mi rten.
109）CDHNP/BLKT:sten byed pa, Ph:rten byed pa.

た。

『世尊よ、菩薩大士たちはどれだけの法を具えたら、速やかに無上正等覚を悟るのでしょうか』

比丘たちよ、そう言われて私は、娑婆世界主である梵天にこう言った。

『梵天よ、菩薩大士たちは一つの法を具えれば速やかに無上正等覚を悟ることになるであろう。一つの法とはなにかといえば、すなわち、「身体に随順する念」である』

比丘たちよ、〔以上のように〕私は娑婆世界主であるかの梵天に、『身体に随順する念』の因（*hetu）と［Zh22］働き（*karman）と果（*phala）を説いたのだ」

III-3 アーナンダへの経の委嘱

そのとき、世尊にむかって具寿（*āyuṣmat）アーナンダがこう申しあげた。

「素晴らしいことです。素晴らしいことです。世［H15a］尊が娑婆世界主である梵天にお説きになられたことを、多くの人たちにとっての医薬〔となるために〕、多くの人たちにとっての幸福〔のために〕、神々と人間たちの利益と医薬と幸福のためにお説きくださるようお願いいたします。新米の[110]比丘たちと、[111…この法と律のもとで出家して間がなく〔この会座に〕やって来ても間もない人たちと…111]、大乗に正しく入ったこれらの良き人（*satpuruṣa）たちは、〔世尊のこのお話を〕聴聞して喜びと信を得て、その修行法に努力を［P10b］傾けています」

そのとき世尊は、娑婆世界主である梵天に語ったことを、それらの比丘に語った。

そのとき世尊にむかって具寿アーナンダはこう申しあげた。

「世尊よ、よく述べられました。善逝よ、よく述べられました。娑婆世界主で

---

110) CDHNP/BPh:sar pa (*nava), KL:sar pa sar pa(*navanava), T:gsar pa gsar pa. cf. *RPP* 122.6–7 : bhikṣusaṃghena sārdhaṃ navakair ādikarmikair acirapravrajitair.... Tib.: dge slong gi dge ’dun dang gsar bu las dang po pa rab tu byung nas ring po ma lon pa dag dang lhan cig tu ....)

111) chos ’dul ba ’di la rab tu byung nas ring po(por) ma lags shing mchis nas ring po ma lags pa rnams dang.

ある梵天がかくのごとき経について質問するために、世尊のもとに赴いて、質問したことは正しく語られたことでした。世尊よ、娑婆世界主である梵天は、たとえ他の善根がなかったとしても、質問をすると同時に生じた［H15b］この善根だけでも、速やかに無上正等覚を悟ることでしょう。なぜなら、世尊よ、かの善根の辺際は、すべての声聞と独覚には理解することができないからです。なぜなら、世尊よ、［Zh23］このように、娑婆世界主である梵天によるこの質問は、あらゆる人々の共通の利益のために（*sāmānya-artham）問われたからです」

世尊が仰せになられる。

「アーナンダよ、そのとおりだ。そのとおりだ」

そのとき世尊にむかって具寿アーナンダはこう申しあげた。

「世尊よ、この法門の名は何なのですか。これをどのように護持すべきなのですか」

世尊が仰せになる。

「アーナンダよ、それゆえ、おまえはこれを『梵天による問い』と理解しなさい。『念（集中力）を留める方法の教示（*smṛtyupasthānanayadeśanā）』と理解しなさい。『不放逸の方法の教示（*apramādanayadeśanā）』と理解しなさい」

世尊がこう述べられたとき、具寿アーナンダと比丘たちと菩薩たちとすべてを含むその集会［P11a］と、神々と人間たちとアスラとガンダルヴァとがいる世［H16a］間の人々は歓喜し（*āttamanas）、世尊が語られたことを称讃した。

聖なる「梵天による問い」という、大乗経典が終る。

インドの学匠であるジナミトラと翻訳官であるイェーシェー・デーが[112]翻訳し、校閲し、確定した[112]。

112）bsgyur cing zhus te gtan la phab pa.　詳しくは、「翻訳し、〔相互に〕質問し、〔疑問点を解消して〕確定した」。

［略号］

AKBh *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, Edited by P. Pradhan, Patna, 1967; 2nd Edition 1975.

Asp *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Edited by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts(BST) No.4, Darbhanga, 1960.

Bcvp *Bodhicaryāvatāra Pañjikā* : *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.12, Darbhanga, 1960.

BHSD *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Volume II: Dictionary*, by Franklin Edgerton, New Haven, 1953; reprint Delhi, 1970.

DBh *Daśabhūmikasūtram*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.7, Darbhanga, 1967.

Divy *Divyāvadāna,* Edited by P. L. Vaidya, BST No.20, Darbhanga, 1959.

DN *Dīgha-Nikāya,* 3 vols, The Pali Text Society (PTS), London, 1889−1910.

KP *Kāśyapaparivarta*, A. von Staël-Holstein (ed.), Shanghai, 1934; *The Kāśyapaparivarta Romanized Text and Facsimiles*, M.I. Vorobyova-Desyatovskaya (ed.), Tokyo, 2002.

Krp *Karuṇāpuṇḍarīka*, Edited with Introduction and Notes by Isshi Yamada, Vol.II, London, 1968.

LV *Lalitavistara*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.1, Darbhanga, 1958.

MN *Majjhima-Nikāya*, 3 vols, PTS., London, 1887−1902.

MPS *Das Mahāparinirvāṇasūtra*, Ernst Waldschmidt ed., Teil II, Berlin:Akademie-Verlag. 1951.

Mvy *Mahāvyutpatti*:『梵藏漢和四譯對校・飜譯名義大集』鈴木学術財団、1916。

MW *A Sanskrit-English Dictionary,* by Sir Monier Monier-Willims, Oxford, 1899; reprint 1982.

PED *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, Edited by T. W. Rhys Davids and William Stede, London, 1972.

RPP *Rāṣṭrapālaparipṛcchā,* Mahāyānasūtrasaṃgraha BST No.1 (Sūtra No. 12), Edited by P. L. Vaidya, Darbhanga, 1961.

Śikṣ *Śikṣāsamuccaya,* Edited by P. L. Vaidya, BST No.11, Darbhanga, 1961.

Suvi *Suvikrāntavikrāmiparipṛcchā Prajñāpāramitāsūtra*, by Hikata Ryusho, Fukuoka, 1958 ; reprint, 1983（臨川書店）.

SN *Saṃyutta-Nikāya*, 5 vols, PTS., London, 1884−1898.

SP *Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, Kern and Nanjio (eds.), St.Pétersburg, 1912.

TCD *A Tibetan-Chinese Dictionary*:『藏汉大辞典』（上・下），张怡荪主编，民族出版社，1993.

TSD *Tibetan Sanskrit Dictionary*, ed. by Lokesh Chandra, New Delhi, 1959; Supplementary Volume 臨川書店 , 2009.

VKN *Vimalakīrtinirdeśa, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese*

Translations, Edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.

［参考文献］

一郷正道［2011］：瑜伽行中観派の修道論の解明：『修習次第』の研究（一郷正道研究代表；小澤千晶，太田蕗子　共同編集）、科学研究費補助金基盤研究 C 研究成果報告書（課題番号20520049）。

梶山雄一［1975］：『八千頌般若経 II　大乗仏典 3 』中央公論社；［2001］中公文庫、中央公論新社。

金倉圓照［1965］：『悟りへの道』平楽寺書店。

五島清隆［2014］：「チベット訳『宝篋経』―和訳と訳注（２）」『佛教大学 仏教学部論集』＃98、27-54頁。

櫻部　建［1969］：『倶舎論の研究』法蔵館。

平岡　聡［2007］：『ブッダが謎解く三世の物語 上』大蔵出版。

Yonezawa［2008］：‘*Vigrahavyāvartanī*: Sanskrit transliteration and Tibetan translation’,『成田山仏教研究所紀要』(31), 209-333, 2008.